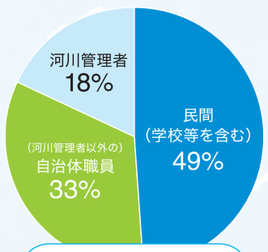
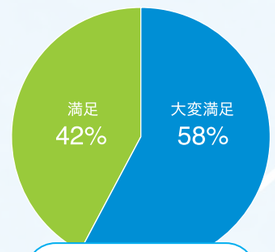
参加者アンケート

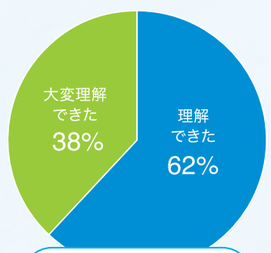
学んでつながって、うごきはじめた水辺の未来



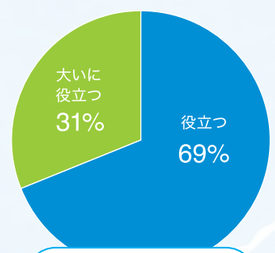
参加者プロフィール



満足度



理解度



役立ち度

参加者のご意見

- 多くの視点で、現場をめぐれたことが楽しかったです。（福井県・自治体職員）
- 行政の方が多く、普段聞けない話がたくさん聞けた。（福井県・民間）
- 現地に実際に向かって、いろんな考えをすることにとって新しいアイデアの生みだし方が非常に参考になった。（兵庫県・民間）
- 現場を自分の肌で感じたうえで実践形式で学べた点が良かった。地元でも開催してほしいです。（福井県・民間）
- 現状のリソースを使った企画をつくっていくところで学べた。（福井県・民間）
- 自分達で考える点がよかった。（福井県・民間）
- 福井県内で実際に開催・実施した水辺のイベント等の事例を、開催までの道のりを混じえて紹介いただけた点が分かりやすかった。（兵庫県・河川管理者）
- それぞれの班のまとめ方が多種多様でとても参考になった。（福井県・民間）

ミズベリングに関するお問い合わせ ＞ MAIL:kkr-kasenmizube@mlit.go.jp

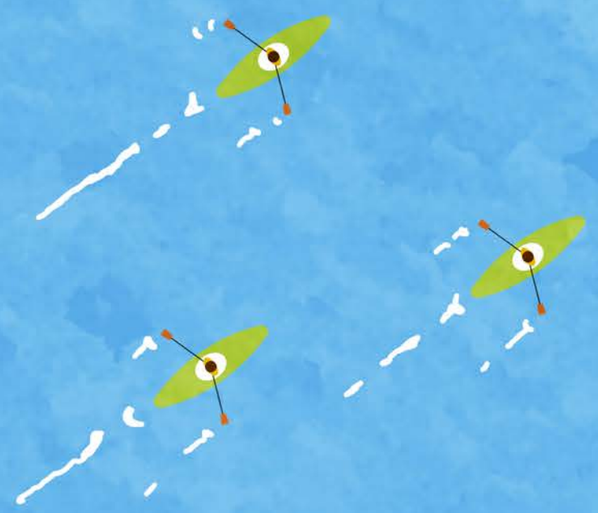
「ミズベスクール」最新情報は公式facebookページをチェック！
https://www.facebook.com/mizubeschool/

「いいね！」を押して参加しよう！

主催：国土交通省 近畿地方整備局

主催：国土交通省 近畿地方整備局

THINK RIVER　MIZBERING



REPORT

2021.12.20 / 21

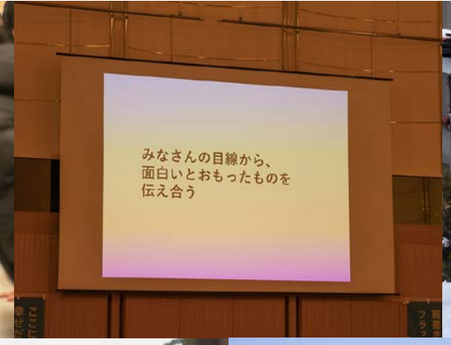
ミズベスクール5

MIZUBE SCHOOL 5

“現場が大事”

福井スペシャル

※撮影時のみマスクを外して撮影しております。



＼答えは現場にあり／

みんなで探そう、ワクワクするミズベの未来。

ミズベを、もっと楽しく、魅力的な場所に。
官民が協働し、水辺とまちが一体となった景観をつくり、
にぎわいのムーブメントを起こすことで
地域の活性化を目指すプロジェクト「ミズベリング」。
その成功のカギは、現場で小さくはじめてみること。
今回のミズベスクールは、福井の水辺を舞台に
現場に飛び出して、にぎわいづくりを考える、トレーニングスタイル。
地理、歴史、建物、ひとなど、現場でしか見えてこないことが
アイデアをもっとワクワクするものに、さらに具体的なものに育んでくれる。
肩書も立場も越えて、かわとまちをめぐり、水辺の未来について考えました。

PROGRAM

DAY1：2021.12.20（月）
ミズベスクール5
福井県国際交流会館 特別会議室

10:00　開会挨拶
10:10　オープニング・アクト
　■ミズベリング・プロジェクトとは
　■かわまちづくり支援制度
10:50　【第一部】地方の水辺はどうやったらアツくなるのか？
　■キーノートスピーチ『行動すれば希望が見つかる。妄想を現実にしちゃった福井の水辺』
　■ミズベトークセッション『地域が水辺を生かすとき』
13:00　【第二部】福井のミズベ魅力発見ツアー
16:10　DAY2に向けて
17:00　閉会

DAY2：2021.12.21（火）
実践！ミズベの賑わいづくりin九頭竜川
永平寺町 四季の森複合施設 絵天井広間（傘松閣）

09:00　まちあるき
13:30　ワークショップ
15:40　ミズベの賑わい案発表
16:40　全体講評、記念撮影
17:00　閉会

発表資料は近畿地方整備局WEBページ内で公開中！
URL　https://www.kkr.mlit.go.jp/river/manabuasobu/mizuberingp.html
QRコード

ミズベスクール5
MIZUBE SCHOOL 5

事例を学び、現場に足を運び、にぎわいのアイデアを出し合う。実践を通してノウハウを体感する2日間。

水辺を生かしたまちづくりの未来を、地域住民・企業・行政が垣根を越えて学び合うミズベスクール。今回のキーワードは“現場”です。福井県・九頭竜川の新たな水辺空間「ナミノバ」「シカノバ」を教材として、永平寺町役場の皆さんや、発起人の田中謙次氏、福井河川国道事務所にも協力いただき、水辺から始まるまちづくりの可能性を考えました。

ナミノバとシカノバで学ぶ、「にぎわいづくり」のアイデア

ナミノバ・シカノバは、「福井県をカヤックの聖地に！」というテーマのもと、行政と民間が目標を共有し、連携し合いながら生み出された空間です。しかし、市街地から遠いため、「人々をどのように招き入れるか」といった課題を抱えており、解決策が模索されています。今回のミズベスクールでは、参加者の皆さんが「ナミノバ」「シカノバ」の現状や周辺地域を、実際にリサーチし、現場の課題解決に向けたアイデアを考え、ミズベのにぎわいづくりを実践的に学びました。

「ナミノバ」「シカノバ」って？

ナミノバ

永平寺町中島に設置したフリースタイルカヤックコース。関西電力市荒川発電所の放水を利用したこのコースは、年間を通じて最大80t/sが流れ出ます。放水路直下流に設置したブロックによってウェーブを起こすこのコースは、安定した流れが特徴で練習だけでなく世界大会の開催を目指します。

空撮動画

シカノバ

永平寺町鳴鹿にある、鳴鹿堰堤の上流、鳴鹿橋から上流エリアの静水域でカヤックやEボート、SUPなどの体験ができます。現在、利用調整中のため、イベント開催で皆様に楽しんでいただいていますが、今後は、観光や教育など定期的な利用をめざして、協議会で議論を進めています。

空撮動画

PROGRAM

DAY1 2021.12.20(月)

DAY1 開会

10:00 ～

開会挨拶

観光立国をめざす日本において、水辺を新たな「まちの顔」として活かそうという機運が高まってきたと感じています。今回は、福井県の九頭竜川で進められているナミノバ・シカノバの取り組みから、人々がもっと水辺に興味を持ち、水辺からまちを盛り上げるにはどうすればよいかを、皆さまと考えたいと思っています。

国土交通省
近畿地方整備局
福井河川国道事務所長
宮本 久仁彦 氏

DAY1

10:10 ～

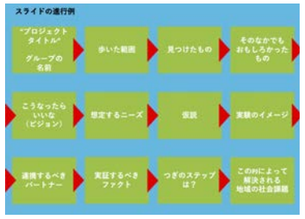
オープニング・アクト

水辺の利活用を考える「ミズベリング」や、河川の整備からまちづくりを後押しする「かわまちづくり支援制度」について、専門家が実例を交えて紹介しました。水辺とまちづくりの関わりを入り口に、“現場”での実践が始まります。

ミズベリングとミズベスクール5でめざすこと

現場から課題を見つけ、水辺活用の新たなアイデアにつなげる

河川空間活用ノウハウを学び、水辺の賑わいのための新しいアイデアを考える。そして、さまざまな人と連携し、描いたビジョンに向けて取り組んでいく。これまで積み重ねてきたミズベリングの手法を、今回は福井県の“現場”で実践します。現場で感じたことを立場の違う人たちと話し合い、意見を出し合える機会はなかなかありません。ぜひ、自ら課題を発見し、多様なメンバーとアイデアを共有してください。答えは、現場にあります。

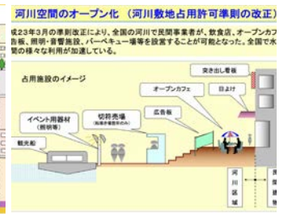


水辺総研
岩本唯史 氏

「かわまちづくり支援制度」について

地元の熱意からはじまる、「かわ」と「まち」の賑わいづくり

住民の方々が、地元の河川を活かすためのアイデアを検討し、活用に向けたプロジェクトを進めたいと思ったとき、その熱意を後押しするためにつくられたのが「かわまちづくり支援制度」です。支援制度の中では、親水護岸を整備したり、河川管理用通路などを整備してサイクリングロードをつくったりと、まちのにぎわいづくりに合わせて、必要な整備を行っています。どうしたら人が水辺に集まるか、ミズベスクールの中で検討していきましょう。



近畿地方整備局
横守伸彦 氏

参加者からの質疑応答

Q かわまちづくり支援制度の利用は、地域発信が前提なのですね。

横守 はい、地域の方のアイデアから始まります。

Q 去年も参加し、かわまちづくりの参考になりました。今回も理解が深まる機会にしたいです。

横守 地元の方目線でのコミュニケーションなど、地元の熱意と周りの協力の大切さに注目してみてください。

Q 持続可能な水辺の活用ポイントについて教えてください。

横守 かわまちづくりを進めてきた中で、環境を整備したもののうまく活用ができていないことがあり、持続化という点で課題でした。川だけを見るのではなく、人の動く導線にもっと注意を向け、かわとまちを一体にとらえてまちづくりをすることが大事になると思います。

岩本 かわとまちを一体として考えることは、本当に重要なポイントです。河川の活性化をめざす地域の人たちと、それを支援する行政の関わりのきっかけづくりが、持続化につながると思います。

DAY1
第1部
10:50 ～

地方の水辺はどうやったら アツくなるのか？！

小さな行動から大きなムーブメントを起こしている福井の事例をひも解きミズベの専門家たちが成功への秘訣を語らいました。

キーノートスピーチ

Theme

『行動すれば希望が見つかる。～妄想を現実にしちゃった福井の水辺～』

環境文化研究所
田中謙次 氏

資金ありきではなく、行動ありき

ナミノバやシカノバなど私たちのプロジェクトは、成功が担保されない状態から始まりました。資金ありきではなく、小さなアクションを重ねる中で色んな希望が見つかり、実現に至りました。まずは例として、福井県からは離れてしまいますが、鳥取県 日野川でのイベント「おしゃれなリ・BAR」をご紹介します。

ニーズを形にしていくから、協力者が見つかる

「おしゃれなリ・BAR」は「若者をもっと水辺に」をテーマに、当初はオープンカフェ形式のバーを一夜限り開いたもの。それが最終的にはワインフェスやコンサートなどが開催される五日間のイベントに成長しました。水辺のニーズをくみ上げ、小さいことから地道に形にしていったわけですが、行動すれば希望がやってくるんですね。行政が私たちの姿を見て「力になれることはありませんか？」と。当初、行政からはイベントへの資金投入のお話をいただいたのですが、「まずは水辺をもっとみんなが楽しめる空間に変えしょう」と提案し、川辺に20mもの大きなテントを張ることに。それをきっかけにバーベキュー場などが次々と設置され、行政と民間がいっしょになった水辺空間がつくり出されました。妄想とニーズを形にする中で、垣根を越えてさまざまな利用者と協力者が集まり、新たな成果が生まれる。そんなイノベーションを実感しました。

福井県の永平寺町を、メダリストを生み出すまちに

ナミノバ・シカノバは、「メダリストを生み出すまちづくり」という妄想から始まりました。カヌー競技は人口が少なく、充実した環境さえあれば多くのメダリストを輩出できるチャンスが眠っています。そこで福井県 永平寺町の九頭竜川に白羽の矢が立ち、町長さんに「改修工事のお金は自分たちでなんとかします」と相談したところ、GOサインをいただけました。
資金集めではクラウドファンディングに挑戦。313万5,000円もの応援資金が集まり、地元企業さんのご支援が加わって、最終的には倍近くの約600万円に。河川改修工事は基本的に行政がやるものですが、民間の力で行うことができました。さらに現在は、「鳴鹿」の緩やかな流域に初心者でもカヤックを楽しめる場所として「シカノバ」を開発中で、子どもたちと一緒に使い方をリサーチしています。いずれも行政や資金ありきではなく、妄想と小さな行動からはじまったもの。それが少しずつ形になるにつれて私たちの熱意が行政や企業、地域住民などに伝播し、大きなムーブメントが起こっています。水辺を面白くするのは、みなさんの妄想と小さな実行です。今回のミズベスクールでぜひ妄想を膨らませ、初めの一歩を踏んでください。

ミズベトークセッション

『地域が水辺を生かすとき』

登壇者

水辺総研
岩本唯史 氏

環境文化研究所
田中謙次 氏

永平寺町
斉川貴史 氏

水辺総研
滝澤恭平 氏

福井河川国道事務所
豊田陽介 氏

Talk Theme 1 プロジェクトを成功に導く秘訣とは

岩本 「田中さんの『約束された成功はない』という言葉が大切ですね。田中さんの取り組み方について、皆さんはどう思われましたか？」

豊田 「資金をクラウドファンディングで募ったことに行動力を感じました。我々国土交通省も『河川法ではできません』ではなく、『できる方法から考える』ことを意識したいです」

滝澤 「九頭竜川は市民から集めた資金で土木事業を実施していることに一番驚きました」

田中 「公的資金の支給を待つには時間がかかり、プロジェクトにはスピード力が欠かせません。そのため、クラウドファンディングで民間企業からの出資をお願いしました」

岩本 「ソーシャル・インパクト・ボンド（民間資金を活用して社会課題解決型の事業を実施する取り組み）に近いことをされているんですね。また、行動が成果につながるのは当たり前に見えて案外難しい。こちらはどうお考えですか？」

田中 「小さいリスクで最初の一手を打ち、成功すれば参加者の意識が変わり、『じゃあこれもできるんじゃない？』と広がっていきます」

岩本 「成功への補助線を引いてあげるということですね」

Talk Theme 2 持続可能な水辺の構築方法

岩本 「地域住民へはどのように情報発信・意思疎通されていますか？」

豊田 「SNSを用いた情報発信で、若い世代や河川に興味がなかった人向けのPRを行っています」

斉川 「『ナミノバ』や『シカノバ』という言葉を知る永平寺町の住民と、地域の取り組みをつなげることを意識しています」

滝澤 「自宅近くでプロジェクトを始めてみれば、他地域の住民とも話が通じやすくなり、『川の魅力を伝えたい！』という人の前向きな連鎖がつながります。また、『河川にアクセスできる場所がある』というのが重要です。その点、ナミノバ・シカノバはきちんと整備されていますね」

岩本 「コスト意識や地域自治、安全管理の問題などを模索し、持続可能な水辺を構築するというのが今後の課題ですね」

Talk Theme 3 地域住民を巻き込んだまちづくりを

岩本 「“地域”という話が先ほどから出ていますが、地域は主語でありながらプロジェクトの運営主体とは言い難い。地域は主体となれるのでしょうか？」

田中 「私は地域という言葉ではなく、“地元”と表現しています。“地元”は主語になり得ると考えています」

岩本 「これまでは地域住民の意見集約が十分ではなかった。そこで田中さんは、ミズベリングによって新たな意見交換の場を設け、地元が強くなるきっかけをつくった」

田中 「かわまちづくりはある意味コンテンツづくりの側面がありますので、まずは3、4名の集まりをいくつか形成し、それらの輪が重なり合いながらお互いにコミットメントする手法がマッチすると考えています」

岩本 「関心が高い人の小集団からスモールスタートするのがいいということですね。永平寺町ではこの点について、これまで取り組んできたことはありますか？」

斉川 「回覧板でナミノバのオープニングイベント・デモンストレーションを周知しました」

岩本 「回覧板というメディアはすごいですよね。地域活性化の活動を情報発信する場所として有用で、地元の水辺を活かす重要な連携手段です」

参加者からの質疑応答

Q 多様な人材、特に若い年代の方が参加されていることに驚いています。プロジェクトに人を巻き込むときのポイントがあれば教えてください。

田中 「『人づて』が一番です。まずは親しくなって川に出かける第一歩を踏み出し、それを見た人が『面白そう』と集まる。そうして主体的に水辺を楽しんでいただきたいです」

Q かわまちづくりの事業成果の指標は何でしょうか。また、人が集まることでゴミ問題や渋滞などのマイナス効果が予想されますが、どのような取り組みを計画していますか？

豊田 「シカノバと周辺観光地を整備して多くの人が訪れる場所をつくり、地域を元気にすることが事業成果です。マイナス面については、管理・運営体制の整備と資金集めの仕組み構築を検討中です」

岩本 「プロジェクトは地域の人々にとってメリット／デメリットの双方をはらんでいます。それさえも「面白い」と感じながら乗り越え、楽しみながら仲間づくりができる、というのを事業成果の指標にしたいです」

DAY1
第2部
13:00 ～

福井のミズベ魅力発見ツアー

福井のミズベからメダリストが続々と生まれていく！？
妄想が実現していくミズベ活動拠点「ナミノバ」「シカノバ」を体感し、参加者がさらなる妄想を加えていく。

ナミノバ

世界に誇るカヤックの聖地に！

ナミノバは、関西電力市荒川発電所からの放流水と九頭竜川の合流点にあり、毎秒最大80トンもの水が流れています。その環境を生かし、放水路直下流の川底にコンクリートブロックを設置することで、フリースタイルカヤックに適した激しい流れ「ホワイトウォーター」をつくり出しました。放水量が少なく、波が緩やかな日はSUPサーフィンにも最適。実はサクラマスやアユの生息地としても有名で、アユ釣りのメッカという田中さん。当初は地元漁協からの反対もありましたが、対話を続けることで、漁協のアドバイスによってアユなどに適した環境工事を実現。カヌーだけでなく、自然環境に配慮した場所になっています。
激しい流れを特徴とすることから、利用者は経験者に限定。競技選手はまだ少ないのですが上級経験者の利用が徐々に増え、中には北海道から北陸に移住した人もいます。2022年春にはフリースタイルカヤックの大会を開催予定です。

プロのカヤッカー・松永和也選手が圧巻のパフォーマンスを披露してくださいました！

松永選手は、フリースタイルカヤック（競技時間内に技を繰り出し、その合計点で競う）で日本１位・世界ランキング4位の実力者。ナミノバの企画・構想から参加し、田中さんらと共に最高の練習環境をつくり上げました。

松永選手に聞いてみました！

カヌーだけのために河川工事を行えるなんて夢にも思わなかったです。それが実現できたのは田中さんや永平寺町をはじめとした地元の方々のおかげ。ナミノバは、世界屈指の激しい波を安定して味わえ、それが高速道路を降りて５分という好立地にあります。この場所や地元の人たちに惚れ込み、最高の環境でメダルをめざせます。

河川敷には注意看板を設置

河川敷は誰もが自由に使える場所ですが、命の危険を伴う場所であることからルールを設定。看板のＱＲコードからエントリシートを入手してもらい、装備や経験、複数人参加、救助知識の有無などのチェックと、個人情報を記入し送信してもらっていると言います。強制ではないが、こうしたルールが川を守り、みんなが楽しめる場所になる第一歩になると田中さん。

シカノバ

メダリストへの一歩はここから！

シカノバは、鳴鹿大堰の上流にあり、ほぼ波がない静水域。初心者がカヤックやカヌー、SUPサーフィン、Eボートなどを楽しむのに最適。現在はまだ整備段階のため、体験イベントの開催などに限定して利用しています。
田中さんの夢は、シカノバでカヌーを学んだ子どもたちが、ナミノバへとステップアップし、メダリストになること。そのために、川の真ん中にブイを設置し、スプリングカヌーの練習場にしたり、ナミノバとシカノバを行き来する自動運転車を走行させたり、松永選手によるカヤックスクールのために環境を整備したり、いろんなことを妄想中。まだまだ多くの可能性がある場所で、これから理想のカタチをめざしていきます。

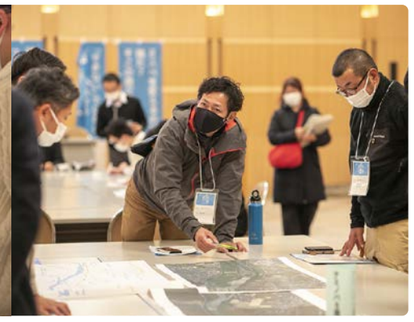
旧自動車修理工場跡等は、どう活用する？

親水護岸の隣には、自動車修理工場だった建物があります。こうした近隣の資源に着目し、利活用を考えることもミズベリングのポイント。たとえば、カヤックを保管し、持ち運ばずに利用できるようにしたり、簡易なカフェなどの休憩場として整備したり…。
また、道の駅との協力で、イベント時のケータリングや出店なども検討。護岸道は一般車が侵入できないので、自由な利用が可能。さらに近くの国交省管理の水防地も一部利用することができます。アイデア次第でシカノバは劇的に変わるはず。「さあ、みなさんなら、どう考えますか？」と田中さんから参加者に投げかけられました。

班分け

二日目のまちあるきのルートを検討

二日目には少数班に分かれ、ナミノバ・シカノバの周辺のまちを散策します。ナミノバ・シカノバの見学から、さらなる賑わいづくりをめざすアイデアを生むために、どんな周辺地域の資源が生かせるかを検討しながら、当日めぐるルートを検討しました。



PROGRAM

DAY2 2021.12.21(火)

実践！ミズベの賑わいづくり in 九頭竜川

「ナミノバ」「シカノバ」と、その周辺のまちをどのようにつなげ、
ミズベやかわまちの価値を上げていくのか。
実現可能で“アツい案”をつくっていくフィールドワーク＆ワークショップ！

プログラムの流れ

まちあるき

班ごとに散策のポイントを掲げ、
ファシリテーターとともに賑わいづくりのネタを集めました。

ナミノバ A班

水路や集落など、人と生活にかかわる環境にも注目し、地域に根ざした発展の可能性を検討した。

1. 古民家café&ドッグラン
2. 福井県伝統家屋群「中島地区」
3. えちぜん鉄道「越前竹原駅」
4. ナミノバ・古民家群・発電所を見渡せる、中島地区の端へ
5. ナミノバと河川敷公園
6. 道の駅「禅の里」。販売商品などもチェック
7. 湧水と水路がめぐる「坂東島地区」

ナミノバ B班

利活用できる資源を探すとともに、インタビューを行い、まちのひとの「生の声」からもアイデアを探った。

1. 古民家café&ドッグラン
2. えちぜん鉄道「越前竹原駅」駅ホームからの眺望も確認
3. 福井県伝統家屋群「中島地区」
4. 河川敷公園
5. 道の駅「禅の里」。駅長にヒアリング
6. 繊維工場が点在する「坂東島地区」

シカノバ A班

地理や歴史、地域住民から得た情報を念頭に置きつつアクティビティの効果的な配置場所を検討した。

1. 永平寺中学校グラウンド裏の水辺チェック
2. 寺院住職から昔の永平寺町についてヒアリング
3. 鳴鹿橋河川敷
4. 鳴鹿橋からの眺望を確認
5. 旧自動車修理工場
6. 九頭竜川資料館わくわくRiverCAN

シカノバ B班

表通りから路地裏までくまなく足で調査し、駅からシカノバまでのワクワクできるルートを考えた。

1. 自動運転サービス「ZEN drive」
2. 表通りからシカノバへ
3. シカノバと国交省管理の空き地を視察
4. 永平寺口駅まで戻り、別ルート調査
5. 裏路地から向かえるルートを探索
6. 「禅の道」

ワークショップ

まち散策で得た情報や感じたことなどをもとに、班ごとに話し合いながら
ナミノバ・シカノバをはじめとした水辺とまちの賑わいづくりのアイデアをまとめます。

発表

班ごとにアイデアを発表。
永平寺町の河合町長に講評いただきます。

DAY2 9:00 ～

まちあるき

ナミノバ班

ナミノバへのアクセス拠点となる越前竹原駅や道の駅「禅の里」を基点に周辺地域を散策。伝統家屋群や、繊維産業が息づく集落など、潜在力を秘めた魅力的なまちにワクワクが高まり、それらをナミノバとどのようにつなげ、かわまちづくりを行うのか。そのヒントを探りました。

まちあるきMEMO A班

2 福井県伝統家屋群「中島地区」

伝統家屋の再活用で、ナミノバ観光の拠点になれるかもしれない。集落は周囲より小高く、ナミノバを見通せる場所もある。

6 道の駅「禅の里」

地元の人が、野菜や工芸品を販売できる憩いの場。温泉も隣接しており、ナミノバ観光の足がかりとして活用できるかも。

7 水路のめぐる「坂東島地区」

繊維工場跡や日本家屋、酒造も並ぶ集落。湧水から流れる水路が町の中をめぐっている。山王側と勝山側をつなげば、地域全体で発展できる。

4 ナミノバの水流の源「市荒川発電所」に注目

ナミノバ独特の水流を生みだす発電所からの流れ。見学やプロジェクションマッピングで場所を活かせる？

まちあるきMEMO B班

1 古民家café&ドッグラン

「お客様は県外からも。飲食できる場所ができ、地元の方にも喜ばれている」とオーナー。ドッグラン利用者がナミノバまで足を運んでもらうにはどうしたらいいだろうか。

2 えちぜん鉄道「越前竹原駅」

景色が素晴らしいが、駅からは川が見えず、ナミノバまでの導線づくりは不可欠。また、ナミノバの最寄り駅とわかる象徴的なものを置いたらどうか？駅舎にカヤックを飾っては。

3 福井県伝統家屋群「中島地区」

インスタ映えしそう。鬼瓦なども見応えがある。家屋に共通する波や龍みたいな装飾はなに？気になる。選手の宿泊場所など、民泊に良さそう。

4 河川敷公園

河川敷が広大で、もっと幅広い利用ができるはず。コンテンツ次第で大きく変わると思う。

DAY2
9:00 ～

まちあるき

シカノバ班

シカノバの玄関となる永平寺口駅周辺を調査し、観光客をどうすればシカノバまで誘導できるかを考えました。このあたりのエリアは、地域住民が生活を送る場としての色が濃いため、ゼロベースでアイデアを考えることが鍵になりそうです。

まちあるきMEMO A班

1 永平寺中学校グラウンド裏の絶景ポイント

永平寺町中学校のグラウンド裏には九頭竜川が面しており、悠々とした川の流れを一望できる。ここに楽しそうなアクティビティを設置すれば、観光客の関心を惹くことができる。

4 鳴鹿橋

車社会の永平寺町において、自動車から見える九頭竜川ビューポイントを押さえることは必須。鳴鹿橋からの眺望はアクティビティを魅せるのにうってつけ。

3 鳴鹿橋河川敷

仮設トイレや河川スロープの設置に加えて、護岸工事された水路からカヤックを漕ぎ出すことも可能かもしれない。

5 旧自動車修理工場

1日目に見学した旧自動車修理工場を再度訪問。許可をいただき内部をチェックすると、カヤックの艇庫や商業施設などに利用できそうな空間が広がっていた。

まちあるきMEMO B班

1 自動運転サービス「ZEN drive」

日本初の無人の自動運転サービス。1人の遠隔監視者が3台の自動走行車両を運行する体制をとっている。ナミノバとシカノバを繋ぐ運行手段として使えるかもしれない。

4 旧京都電燈古市変電所

駅近くに、レトロな赤レンガの外壁が特長的な建物が。シカノバへの導線として、看板や目印となる施設が必要。

2 シカノバへのルートを探る

シカノバへの導線を考えるために、さまざまなルートを散策。シカノバへ行く一般的なルートはあまり趣がなく、工夫が必要。

5 裏路地

地域の住民が日常的に使っていそうな裏路地も散策。水路があり、川辺とのつながりが感じられる。歩いていて面白いルート。

DAY2
13:30 ～

ワークショップ

現地視察で見つけたネタをもとに、班メンバーが本気の意見をぶつけ合いながらアイデアを広げ、深めて、ナミノバやシカノバを中心とした賑わいづくりの案を練りました。各班とも濃縮したディスカッションで、短時間とは思えない仕上がりに。

ナミノバA班

ナミノバと周辺スポットをつなぐ流れがないことに着目。導線づくりとともに、地域の人たちと一緒になって発展していけるまちづくりを考えました。

班メンバーの意見

- ○温泉やカフェなどの点と点を、バスなどの移動手段でつなぎ導線をつくりたい
- ○歩いていける範囲の古民家群を利用した施設をつくれないか
- ○カヌー初心者にも親しんでもらえるよう、カヌー教室などをオープン
- ○若い世代が興味を持ってくれる、バーなど夜でも楽しめるお店づくり
- ○河川敷に音楽フェスを誘致

ナミノバB班

カヌー競技者、スポーツ観戦者、ドッグラン利用者に対象を絞り、三者が「もっとまちにステイしたくなる」ためのフィールドづくりを検討しました。

班メンバーの意見

- ○古民家をカヌー選手のホームステイ先に。選手と地元住民との交流も生まれる
- ○駅の利用者を増やすには、お酒を提供するイベントの開催がいい
- ○駅からナミノバやドッグランへの道路にカヌーや犬のマークを塗装し、誘導する
- ○スタンプラリーで、駅や各スポット、ナミノバを周遊できるようにしては
- ○河川敷にもドッグランスペースなどをつくる

シカノバA班

東古市地区を「永平寺町の玄関口」として機能させることを検討。車窓から見えて、興味が湧くアクティビティを考えました。

班メンバーの意見

- ○旧自動車修理工場をカヤックの艇庫として利用する
- ○既存水路をカヤックのウォータースライダーに活用する
- ○河川管理用スロープを設置し、昇降を容易にする
- ○水上アスレチック・ジップコースター・ジェットスキーの設置
- ○「禅の里」にちなみ、水上での瞑想アクティビティを実施したい

シカノバB班

自動運転サービスZEN driveでナミノバとシカノバを繋ぐステーションや、観光客がワクワクするようなシカノバへのルートづくりを検討しました。

班メンバーの意見

- ○川辺で冷えて疲れた身体を温めながら、休憩できるスペースをつくろう
- ○SDGsを取り入れて、水力発電などのエコロジー面もコンセプトに組み込む
- ○カヤック以外にも楽しめるアクティビティも用意
- ○公設民営であれば、行政機能が必要。防災拠点としての機能をもたせる
- ○近くに中学校があったので、水辺の教育という観点も組み込んでは

DAY2

15:40 ～

ミズベの賑わい案発表!!

２日間の学びの集大成。アイデアとともに、
想いを込め、発表に挑みました。

ナミノバA班

「ナミノバロード大作戦」

水辺総研
滝澤恭平 氏

道の駅とナミノバを、線でつなぐというアイデアからスタート。地元との連携を考え、住民にとってのメリットが、ナミノバの発展につながる点にも気づけました。地域と一緒になって取り組めるプロジェクトを構想できました。

スポットをつなぎ、人の滞留を生み出す

ナミノバや河川敷、古民家など、永平寺町には魅力的なスポットが多くあります。これらのポイントをつないで地域を発展させる方法を検討し、ナミノバと道の駅を結ぶメインストリート、「ナミノバロード」を構想しました。

ロードからエリアへ、地域を巻き込み発展させる大作戦

ナミノバをまずは地元の人に知ってもらえるよう、拠点は道の駅に設置。ナミノバロードを取り巻くエリアには、古民家を再活用した店舗や、河川敷を利用したイベント施設などを整備。人の流れを自然にナミノバへと誘導します。移動には自動走行バスも活用。直線道路での移動時に退屈しないよう、中州にアートなどを設置。見て楽しい景観づくりをめざしました。また、対岸である坂東島地区にも着目。ジップラインで両岸をつなぎ、繊維工場跡を使ったクラフト工房での体験も可能に。ナミノバの水流を生み出す市荒川発電所の観光整備なども含め、大きなエリアでの発展を模索しました。地元の人とナミノバ利用者でつくる「ナミノバロード」から、いずれは九頭竜川の両岸を巻き込む「ナミノバエリア」へと拡大し、地域全体の発展につなげていきます。

ナミノバB班

「ナミノバ・ステイション」

環境文化研究所
田中謙次 氏

対象エリアを絞り、より現実的で実現できそうな案になったと思います。ポイントは、地域の方々が幸せに感じられるものになっているか。そこを大切にしながら、次回のカヤック大会に向けて今回の案をひとつでも実現させたいですね。

古民家をカヤッカ―の長期滞在先に

ナミノバがあることによって、まちに“ステイ”したくなる施策を考えました。まずカヌー競技者には、地元住民にご協力いただき、古民家宅をホームステイ先として紹介。長期の練習拠点にしてもらうことで地元住民との交流が深まり、選手と地域が一体となってメダリストをめざします。さらに、子どもたちの遠征拠点など、将来のカヤッカーを育む場としても活用します。

スポーツ観戦の人気スポットへ

競技者だけでなく観戦者を受け入れるために、大会の開催はもちろん河川敷を観戦空間として整備。たとえば中州に観戦席を設け、橋を架けます。またさまざまなイベントを誘致。飲酒ＯＫなら駅の利用者増、夜のライトアップならナイトビジネスにつながる可能性も期待できます。普段はドッグランのスペースなどとしても開放し、カヤッカー以外の水辺流入もめざします。越前竹原駅は「ナミノバ駅」と改名し、認知を拡大。道標や看板なども整備し、駅からの導線づくりも行います。まさにナミノバが人を集める「拠点」となり、そこから各々が自由にまちを楽しみ滞在できるフィールドをめざします。

飛び入り参加 第5班

鳴鹿大堰ゲートに日本酒貯蔵場を

鳴鹿大堰のゲート下部の空洞に、永平寺町の酒蔵の日本酒を貯蔵し、お披露目会などのイベントを開催してみてはいかがでしょうか。ゲートへの運び入れをカヤックで行うと面白いのではないかと。

河川敷公園ドローン練習場事業

九頭竜川河川敷公園内にドローン練習場を整備し、カヌー利用の待ち時間や合間にドローンを楽しんでもらいます。ドローンへのニーズが高まる中、利用区域が少ないことから話題になると思います。

福井河川国道事務所
小我野 昭男さま

シカノバA班

「東古市の水辺は永平寺町の新しい玄関口」

水辺総研
岩本唯史 氏

楽しみながらプロジェクトを進めたいと考える方を増やすため、今回は寸劇調での発表を行いました。「こんな未来を実現したいな」と考える人々へのアプローチとして、今回の発表は有意義だったのではないかと思います。

水辺の美しい風景に着眼

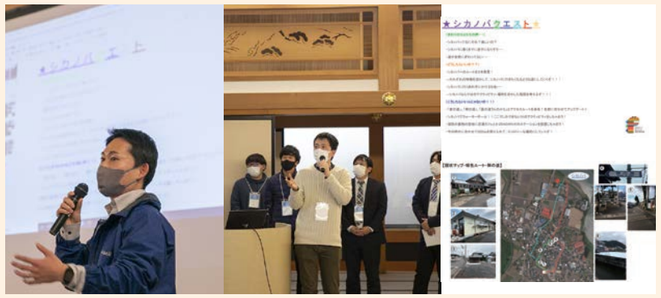
永平寺町を車でドライブした際の眺望に注目し、東古市という土地を活用するプランを検討しました。実は、車窓から九頭竜川を見ることができるのは限られたポイントのみ。この眺めを活用しない手はありません。寸劇調の発表では、まち散策で発見した絶好のビュースポットを紹介。永平寺中学校のグラウンドを抜けて階段を降りると、九頭竜川の広大な流れを一望できる空間が広がっていました。この水辺ではアユ釣りや写真撮影が行われ、上流側では灯籠流しが開催されるなど隠れた人気エリア。カヤックや水上での瞑想を実施すれば、眺めの良い場所から目に入り、観光客が興味をもってくれるはず。つまり、東古市という地域を「永平寺町に新たな観光客を呼び込む玄関口とする」プランが成立するのです。

旅雑誌に取り上げられるようなコンテンツを目指す

現在、東古市は永平寺町の中心街からは離れた場所にありますが、過去には東古市の九頭竜川流域にたくさんの舟が通り、物流の中心地となっていました。そう遠くない将来には、東古市の街がオシャレな旅雑誌の「ZEN特集」として取り上げられるかもしれません。

シカノバB班

「シカノバクエスト」



福井工業大学 教授
下川勇氏

永平寺口駅からシカノバまでのルートと、目印となるランドマークづくりに焦点をあてました。ルート計画はシカノバの今後を考える上で必ず議題にあがりますので、ぜひ「表の道」「禅の道」「裏の道」を参考にしてください。

特色あるルート設定で道中にも楽しみをプラス

シカノバへの道行きを「シカノバクエスト」と題し、3つルートを「表の道」「禅の道」「裏の道」と名付けました。「表の道」は表通りからのルートで、赤レンガが特徴的な変電所跡があり、カヤックが置かれた写真撮影スペースを設ければ、注目される場所がつくれそうです。「禅の道」は近隣のお寺や神社の前を通るルートで、実は元々からある道です。看板も既に立っており、道中には古民家カフェなどもあります。「裏の道」は裏路地からシカノバへ向かうルート。地域性が表れており、この先に何があるんだろうというワクワクを感じられます。

シカノバ近辺を多彩な場所に

ゴールのシカノバ近辺には、自動運転サービスZEN driveを活用した、ナミノバとシカノバを繋ぐステーションや、疲れた身体を癒す足湯カフェを設置。水力発電による自然エネルギーを利用し、SDGsの観点を取り入れます。水防団の待機所としても使えば、公設民営も可能になります。水辺にはカヤックの他にも、ウォーターボールなども用意。近隣の中学校と連携し水辺を学ぶ場として活用すれば、地域との繋がりも生まれます。

講評

16:40 ～

永平寺町の河川の在り方は、地元の人が釣りを行う第１ステージから、県外から釣り客が訪れる第２ステージ、そして田中さんなどが新たな価値を見出してくださる第３ステージに入ってきていると感じております。今回のミズベスクールでも魅力的な発表ばかりで「河川が大きな宝になる」ことをあらためて確信いたしました。その中で我々行政ができることは地域、企業、団体、個人を結びつけることであり、立場を超えた協働により河川のにぎわいづくりを叶えたいです。

永平寺町長
河合永充 氏